

平成 21 年 5 月 26 日現在

研究種目： 若手研究 (B)  
 研究期間： 2007~2008  
 課題番号： 19720072  
 研究課題名 (和文) カズオ・イシグロ文学における職業・芸術の倫理的意義  
 研究課題名 (英文) Ethical Importance of Profession and Art in Kazuo Ishiguro's Novels  
 研究代表者  
 廣田 園子 (HIROTA SONOKO)  
 京都女子大学短期大学部・文学科・准教授  
 研究者番号： 30368550

研究成果の概要：本研究では、現代文学を代表する日系英国人作家カズオ・イシグロが生み出す小説世界を、モダニズムに始まる 20 世紀英文学における「英国性」の変遷の中に位置づけることを目指した。そこで「英国性」の発展のプロセスを詳細に分析すると共に、職業及び芸術を個人と国家の関係性の象徴と見なす作家独自のアプローチについて考察し、学会におけるシンポジウム発表及び学術論文の形で成果を得た。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	180,000	1,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英米文学・文学一般

## 1. 研究開始当初の背景

(1) カズオ・イシグロは1982年のデビュー以来現在までに6作の長編小説を発表し、日系英国人作家として英国のみならず世界的な名声を不動のものとしつつある。しかし絶え間なく変貌を遂げる彼の小説についての包括的研究はまだ始まったばかりであり、単著の研究書としてはBrian Shafferによるものが1998年に、Barry Lewis と Cynthia F. Wongによ

る紹介的色彩の強いものが2000年に出版された程度に留まっていた。

そこで研究代表者は、この稀有な現代作家が生み出す小説世界を、モダニズムに始まる20世紀英文学における「英国性」の変遷の中に位置づけ、その国家的アイデンティティ及び個人的アイデンティティの表象と、その二つを結びつける役割を担う職業及び芸術の倫理的意義について検証したいと考えた。

(2) サルマン・ラシュディ、ティモシー・モ어의非英国系作家と共に「他者性」を旗印に1980年代の英国文壇を席卷したイシグロは、しかし自らの独特なルーツに決して安住することなく日本、英国、中国、そしてリアリズムの枠から離れた「異国」を舞台にした小説を精力的に発表している。“International writer”あるいは“privileged homeless”等、イシグロに冠せられる様々な肩書きは彼のユニークな越境性を象徴しているものの、欧米の研究者が彼の“japaneseness”を強調し、彼のテキストの特徴をそこに還元しようと試みることもしばしばであった。しかしイシグロのテキストに通底する、失われた故郷としてと同時に個人を凌駕する巨大な機構としての「国家」のテーマは、むしろ20世紀英文学が多様な形で表象してきた「英国性」の議論の延長上に捉えるべきものであると、研究代表者は考察した。

## 2. 研究の目的

(1) 未だ初期的段階にあったカズオ・イシグロ研究において、6作に及ぶ彼の作品群はhomelessnessあるいはjapanesenessといった彼の自伝的背景に由来する安易なテーマによって従来議論されることがほとんどであり、従って20世紀英文学における国家と個人の表象という大きな枠組みの中に彼の作品を位置づけることは極めて意義深いと考えられた。

これまでイシグロは、その抑制された文体あるいはミニマムなプロットという特徴から、ヘンリー・ジェームズ、アントン・チェーホフ、川端康成、谷崎潤一郎等の雑多な作家との関連を漠然と指摘されてきたが、英国人作家としてのイシグロを「英国性」の表象の変遷という視点から定義し直すことで、イシグロ文学が持つ普遍性の源を解明することが、研究代表者の大きな目的であった。

(2) 彼の作品における職業及び芸術の倫理的

重要性についてはこれまでほとんど議論が為されてこなかった領域であり、国家と個人を結びつけるその役割を新たに考察することで、疎外感や喪失感のみが強調されてきたイシグロ作品の登場人物が放つ独特の存在感を検証することも大きな課題であると考えられた。

## 3. 研究の方法

(1) 研究代表者は、英国性と職業及び芸術、その倫理的意義という研究課題が最も顕著に扱われている2000年出版のイシグロの長編小説第5作『わたしたちが孤児だったころ』(*When We Were Orphans*)に特に注目した。本テキストは、私立探偵という最もステレオタイプな英国的職業に従事する主人公を登場させ、失われた戦間期英国社会を再現するかに見せかけながら、その職業に個人が呑み込まれる過程を描くことで、正に英国神話を揺るがせている。イシグロ自身はこれらの小説を歴史小説として読むことを否定しているがコスモポリタニズムから小英国主義への回帰という大戦間の英国社会の情勢を踏まえて、私立探偵という英国的職業がテキストにおいてどのように脱神話化されているかを検証していくことが重要であると考えられた

(2) 前項の研究を進めるにあたっては、イシグロが作品の中で「再現」を試みた、英国戦間期の推理小説についてのリサーチが不可欠である。そこで19世紀に誕生した英国名探偵の代名詞であるコナン・ドイルのシャーロック・ホームズ・シリーズに始まり、戦間期に英国推理小説の「黄金期」を築いたアガサ・クリスティ、ドロシー・L・セイヤーズ等の作家のテキスト研究を進め、推理小説ジャンルの特色、戦間期における一大ブームの背景について知識を深めた。

また英国の国家的アイデンティティが揺らぎ「英国性」が変貌する中で、主人公が国家

あるいは社会と結びつく手段として自らの職業に固執する背景には、職業を倫理的側面から捉えようとするイシグロの意図が存在していると見られることから、エマニュエル・レヴィナス等を中心とする倫理批評の可能性について考察した。

#### 4. 研究成果

(1) イシグロが『わたしたちが孤児だったころ』を構想するにあたり刺激を得たという戦間期の英国探偵小説について広範なリサーチを行った結果として、その代表的作家の一人であるドロシー・L・セイヤーズの著作に関する研究「炎上する女子コレッジと「パラダイス」の探求」を、日本ヴァージニア・ウルフ協会第27回年次大会でのシンポジウム「National Culture と(Step-)Daughter たち」において発表し、戦間期英国社会について活発な意見交換を行うことができた。

大戦間の探偵小説については近年批評的関心が特に高まっており、イシグロが生み出した「信頼できない」名探偵に関する議論を発展させる上で、極めて有意義な研究であったと言える。またヴァージニア・ウルフをはじめとする、所謂「ハイ・モダニズム」の文学と推理小説ジャンルの接点を探ることで、戦間期英国の読者層について新たな認識を得ることができた。

(2) 戦間期英国社会における英国性の概念及び推理小説ブームの背景に関するリサーチを進展させ、『転回するモダン』（研究社）所収の論文「隠喩としてのインフルエンザ？」に纏め上げた。本論では、第一次世界大戦末期に世界を襲ったスパニッシュ・インフルエンザを巡る社会的・文化的言説の考察を通じて、正に最悪のタイミングで「グローバルイゼーション」の脅威に直面した英国が、個人の身体と精神の統制を図ることで、国家

的アイデンティティの保持を画策した過程について検証した。

この論考によって、第一次世界大戦後の大英帝国の疲弊と衰退、その危機にあって再建を余儀なくされる「英国性」についての諸問題が明らかにされた。

(3) 「英国性」が揺れ動いた戦間期を舞台としたイシグロの第5作長編小説『わたしたちが孤児だったころ』における、推理小説ジャンルの再評価をテーマとした英語論文を執筆した。戦間期に一大ブームを巻き起こした「名探偵」を主人公とする推理小説は、大戦によって精神的基盤を揺るがされた当時の英国国民に、根絶し得る悪と、回復される安全という神話を提供する逃避文学と解釈されることが多かったが、本論では、イシグロがこの「逃避」に倫理的意義の可能性を付与すべく採用した、リアリズムと非リアリズムの世界が混在する小説技法について考察した。

『わたしたちが孤児だったころ』において、主人公バンクスは、自らのトラウマからの逃避として「私立探偵」という英国の神話的職業に没頭しようとする。つまり彼は、黄金期推理小説の世界を「探偵」として再現すると同時に、現実からの逃避を切望した当時の「読者」の姿をも反映した人物として構築されている。そして、あらゆる犯罪と犯罪者が厳密に個別化される黄金期推理小説の世界とは異なり、終わりのない「悪」との戦いを余儀なくされる中で、バンクスは次第に推理小説の世界を離脱し、ド・クインシーに代表される阿片文学を思わせる非リアリズムの語りへと移行していくのである。

しかし本テキストは、叡智の象徴であるべき名探偵のリアリズムからの逸脱を描くことで、黄金期推理小説をパロディ化することを意図したものでは決してない。なぜなら主

人公バンクスの「逃避」は、両親の失踪事件の真相の提示という一つの「現実」の前に一度は断罪されるものの、結果的には彼の生き残りの手段として最後まで保たれるからである。こうしたバンクスの「逃避」の肯定により、イシグロは黄金期推理小説ジャンルの倫理的意義を主張しているに他ならない。

本論は現在投稿中の段階であるが、出版の暁には、イシグロの小説世界の重層性、及び様々な文学ジャンルを自在に駆使する越境性についての議論を高める一助となるものと期待される。また本論での議論を今後更に発展させ、イシグロの最新長編小説である『わたしを離さないで』(Never Let Me Go)における SF ジャンルの活用意義についても検証していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

① 廣田園子、「炎上する女子コレッジと「パラダイス」の探求」、日本ヴァージニア・ウルフ協会第27回全国大会、2007年11月17日、於上智大学。

[図書] (計1件)

① 遠藤不比人、大田信良、廣田園子、他14名(共著)、研究社、『転回するモダン：イギリス戦間期の文化と文学』、2008年、310-322頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

廣田 園子 (HIROTA SONOKO)

京都女子大学短期大学部・文学科・准教授

研究者番号：30368550

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし